

笹川記念保健協力財団 研究助成

助成番号：2016A-020

(西暦) 2017年 2月 17日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

理事長 喜多悦子 殿

2016年度ホスピス緩和ケアに関する研究助成

研 究 報 告 書

標記について、下記の通り研究報告書を添付し提出いたします。

記

研究課題

現在の「お産」と「看取り」に関する講演会を通じた死生観の育成への効果
—20代女性を含む地域住民を対象として—

所属機関・職名 大阪府立大学大学院看護学研究科・准教授

氏名 岡本双美子

I. 研究の目的

本研究の目的は、20代女性を含む地域住民を対象とし、その人らしく快適に安心して“お産”や“看取り”ができるよう、寄り添い、ケアを実践している医療職者らによる講演会『いのちのつながりをみつめて～お産と看取りの現場から～』を開催することが、生と死について考えることの契機となりうるのか、を明らかにすることである。

具体的には、いのちについての考え方の変化や、生と死について家族あるいは地域で継続的に話し合うことへの動機につながるのか、いのちへの感性を育むことにつながるのかなどを明らかにし、20代女性を含む地域住民の死生観の育成への啓発・啓蒙する有益な方法を検討することである。

II. 研究の内容・実施経過

1. 地域住民のいのちに関する認識

講演会の参加者へのアンケート調査

対象：2016年10月29日（土）に開催された「いのちつぐ『みとりびと』」の講演会に参加した地域住民など約100名

講演会の内容：第一部「いのちの現場から」

1. 生死学：誕生と死。迎え、見送ることの類似性
2. お産の現場から
3. 看取りの現場から

第二部 鼎談「いのちのつながりをみつめて」

データ収集法：自記式質問紙調査法を用いた。アンケートの内容は、年齢、性別、仕事の有無、お産に携わった経験の有無、死別体験の有無、『いのちのつながり』について考えたことの有無とその理由、講演会後の『いのち』について思う内容、について。

データ分析方法：質的記述的分析法を用いた。属性については統計的に処理し、自由記述ではいのちについて書かれている部分を抽出してコード化し、類似するコードをまとめてカテゴリー化した。分析の信頼性を高めるために、終末期看護の経験のある複数の看護師・介護士で分析し、最終的に合意がえられるまで分析と議論を繰り返し検討した。

2. 20～40代女性のいのちに関する認識

講演会に参加した20～40代の女性へのインタビュー調査

対象：講演会に参加した20代の女性 約15名

データ収集法：半構成的面接法を用いた。一人約40分とした。インタビュー内容は、年齢、性別、仕事の有無、家族構成、これまでの講演会参加の有無、今回の参加の理由、『いのちのつながり』について考え・話したことの有無とその理由・相手、講演会後の『いのち』について考え・話したことの有無とその理由・相手、講演会後のご自身の変化の有無とその影響、について。

データ分析法：質的記述的分析法を用いた。対象者毎に作成した逐語録から、いのちについての考え方やいのちのつながりについて、書かれている部分を抽出する。抽出した文脈単位は、意味内容の類似したものを集めて分類し、その分類内容を表現している名称を付けてカテゴリー化する。分析の信頼性を高めるために、終末期看護の経験のある複数の看護師・介護士で分析し、最終的に合意がえられるまで分析と議論を繰り返し検討した。

3. 倫理的配慮

対象者に、本研究の目的と方法、研究の参加と中断の自由意思、不参加・中断でも不利益が生じないことの保証、収集したデータおよび結果の匿名性の保障について、文書にて説明した。得られたデータは、用紙とともに施錠できる場所での厳重な保管、研究目的以外での不使用、研究データの保存に関するガイドラインに基づき、研究を終了した日から 5 年または研究成果を最後に公表した日から 3 年のいずれか遅い日までは研究代表者がデータを保存すること、期間終了後、紙媒体はシュレッダー処理し、電子媒体データは削除すること、研究成果の公表について文書と口頭にて説明し、同意が得られた者を研究対象者とした。なお、本研究は大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会による承認を得て実施した。

4. 実施経過

1) 2016 年 4 月：講演会開催に向けて、講師との調整

2) 2016 年 5 月：文献検索を行い、アンケート（案）を作成

3) 2016 年 6 月 24 日（金）：

講演会のアンケート（案）の検討、今後の予定、後援・協力・広報についての検討

4) 2016 年 7 月 26 日（火）：講演会のプログラム、後援・協力・広報について検討

5) 2016 年 8 月 25 日（木）：鼎談テーマについて、講演・協力について検討

6) 2016 年 9 月 9 日（金）：研究倫理審査の申請

7) 2016 年 9 月 30 日（金）：講演・鼎談について、当日の役割分担についての検討

8) 2016 年 10 月 29 日（土）：準備・打ち合わせ、講演会の実施（アンケート実施）

9) 2016 年 11 月 28 日（火）～12 月 23 日（金）：

講演会に参加した 20～40 代の女性へのインタビューの実施

10) 2016 年 12 月 27 日（火）：

講演会の反省、アンケート結果の概要、インタビュー実施状況の報告

11) 2017 年 1 月 11 日（水）：

インタビュー実施状況について、今後の生と死を考える市民講座についての検討

12) 2017 年 2 月 1 日（水）：

報告書・収支報告書作成について、学会発表・論文投稿についての検討

Ⅲ. 研究の成果

1. 地域住民のいのちに関する認識

講演会参加者のアンケート結果

1) 対象：参加者 79 名中、48 名が回答（回収率 60.8%）。

2) 個人特性：年齢は、40 代が最も多く 13 名、次いで 60 代が 11 名、30 代 9 名、50 代 8 名、70 代 3 名、20 歳は 2 名であった。性別は、男性が 6 名、女性は 42 名であった。

仕事有る人は 33 名、なし 15 名、仕事の内容は医療関係が最も多く 14 名、次いで福祉関係 12 名、一般・学生その他はそれぞれ 2 名であった。

いのちの誕生の経験有る人は 26 名、なし 18 名、未回答 4 名であり、その内容は自身の出産が 13 名、親族の出産 6 名、職業上 3 名、未回答 6 名であった。

死別体験有る人は 43 名、なし 2 名、未回答 3 名であり、その続柄は父母が 15 名、義父母 9 名、祖父母 16 名、義祖父母 2 名、職業上 3 名、その他には婚約者 1 名、叔父 1 名、叔母 1 名、ペット 2 名、未回答 6 名であった。

3) いのちのつながりについて考えたことがあるかの問いでは、有る人は 31 名、なし 7 名、わからない 8 名、未回答 2 名であった。

有ると答えた人の自由記述では、両親や祖父母などの身近な人の死や子どもの誕生の経験、職業上の経験、そして、今回の講演や昨年の講演・写真展などがきっかけとなっていた。身近な人の死をきっかけにいのちのつながりを考えた人は、「いのちの繰り返し」や「いのちを受けついでいる」、「先祖があったから次へ続いていく家族がある」、「生まれかわり」、「『あの世』でも縁がある人とは会えると信じています」などの記載があった。職業上の経験がきっかけの人では、「出産がある日と亡くなる日が重なると本当に不思議だと思う」や「生まれた時点で死にむかっている」などが述べられていた。また、「自分のいのちは自分だけのものではなく、生きていくこと、つなげていくために自分の存在があると気付かされた。道端の規、土の中、空のいのちにも感じることができるようになり、つながっていると日々思う。逝（な）くなっていった人の生き方やことばはしっかり私の中で生きています」などの記載があった。

わからないと答えた中でも 1 名は、「単純な話ではあるが、『前世は〇〇だった』とか、どれぐらいの時限でしか（考えて）なかった」や、なしと答えた中の 2 名は、「深く考えた事がなかった。時が流れるままに受け入れていた。」などの記載があった。

4) 『いのち』について今、あなたが思うことの自由記述では、「生があって死がある」や「自然な流れ」で「身近なもの」、そして「別々に考えないでつながりで考えていくと心があたたかくなる」、などが記載されていた。また、「医者任せにするのではなく」や「産まれることも、いのちを終えることも自分で選ぶ」ことを大切にしたい、そして、「一日を大切にしていきたい」や「今を大切にしていきたい」、「精一杯悔いなく楽しく」、「出来ることを全うする」などが述べられていた。

2. 20～40代女性のいのちに関する認識

講演会に参加した20～40代の女性のインタビュー結果

1) 対象：8名。

2) 個人特性：年齢は20歳代が1名、30歳代4名で、40歳代が3名であった。家族構成は、1人暮らしが3名、2人家族1名、3人家族3名、4人家族1名であった。仕事の有無では、有が6名（看護師・介護士、保育士など）、休職中1名、なし1名であった。以前の講演会の参加の有無は、有2名、なしが6名であった。

現在、『いのちのつながり』について考え・話したことの有無とその理由、講演会後の『いのち』について考え・話したことの有無とその理由、講演会後のご自身の変化の有無とその影響、については、現在、質的記述的に分析を行っているところである。

一部では、講演会参加動機について、「題名にひかれて」や「産みが入っていたので自分に近いと思った」、「ケアできることがあってもできないことがありジレンマを抱えていた」などが述べられた。

『いのちのつながり』について考え・話したこととその理由では、「お産と看取りは特別なものではなく一緒である」や「産むことも亡くなっていくことも自分のものなんだ」、「死ぬことも生まれてくることもあらがえない」、「生も死も人任せで医療の影響が多すぎて本来持っている力が出せていない」、「亡くなるということの違う感じ方として、あの世に生まれるというのがある」などが語られた。

講演会後の『いのち』について考え・話したこととして、「あの世があると信じたほうが楽になり、意欲が出たきっかけになった」や「死までをどう生きるか前より考えるようになった」、「どう生きたいか、死にたいかは医療者のいいなりではなく、こうしてほしいと言えたらよい」、「亡くなることも産むことも辛くてエネルギーがあるので、その時に一人にしないことが大事」、「友人の友人が亡くなったことを聞き、死は突如誰にでもあるんだということに突き付けられた」などがあった。

表 講演会に参加した20～40代女性の個人特性

	年齢	性別	家族構成	仕事	講演会参加
A	49	女	4人暮らし：夫、子ども2人	介護士（パート）	有
B	38	女	3人暮らし：夫、子ども（1才）	なし（介護士）	なし
C	36	女	3人暮らし：夫、息子（11か月）	看護師（常勤）	なし
D	32	女	1人暮らし（父、母、兄弟、祖母）	保育士（自営業）	なし
E	34	女	3人暮らし：父、母	介護士（パート）	なし
F	42	女	1人暮らし（父、母、姉）	NPO 障害者福祉施設 管理者	有
G	43	女	2人暮らし パートナー（父、母、姉、甥）	休職中	なし
H	27	女	1人暮らし 父、母、姉	養護教諭	なし

講演会後のご自身の変化とその影響については、「死は怖いことではない」や「産むとか看取るといふいのちのサイクルの中で納得のいく選択をしたら自分を信頼することができることに気が付いて楽になった」、「血を分けた自分の子孫が増えることに価値があると思っていたが、血のつながりにこだわらなくなった」、「死を宗教から考えていたが、講演会後はまた違う方向からの捉え方をするようになった」、「生と死の話がセットだといふのちのつながりの丸が描けるので、あったかい気持ちで聞けた」などが述べられた。

IV. 今後の課題

1. 地域住民のいのちに関する認識

今回の講演会参加者の年齢層は、40歳代が最も多く、30歳代や20歳代の参加も見られた。昨年度の講演会参加者の年齢層で最も多かった60歳代、次いで70歳代、50歳代と比べてみても、若い年代の方の参加が多かったことが分かる。これは、昨年度の講演会のテーマが「いのちつぐ『みとりびと』」であったのに対し、今年度は「いのちのつながりをみつめて～お産と看取りの現場から～」であり、“看取り”のみに焦点をあてた昨年度に比べて、今年度は“お産”にも焦点をあてたことにより、若い年代の方の参加が増えたと考えられる。

地域住民のいのちに関する認識では、『いのちのつながり』について、考えたことが有る人は、両親や祖父母などの身近な人の死や子どもの誕生の経験、職業上の経験、そして、昨年の講演・写真展、今回の講演会などがきっかけとなっていたことが分かった。具体的な内容では「生まれた時点で死にむかっている」や「生まれかわり」、「『あの世』でも縁がある人とは会えると信じています」、「自分のいのちは自分だけのものではなく、生きていくこと、つなげていくために自分の存在があると気付かされた」などの記載があった。今回の講演会でのキーワードは“いのちのつながり”であり、今回の講演会では、死だけではなく、生とのつながりから死を見つめる、あるいは、生から死を見つめる、という両端に見えていたものをつながりとして捉えることで、生と死について考える機会となったと考える。

また、『いのち』についての自由記述では、「別々に考えないでつながりで考えていくと心があたたかくなる」、などが記載されていた。また、「医者任せにするのではなく」や「産まれることも、いのちを終えることも自分で選ぶ」ことを大切にしたい、そして、「一日を大切にしていきたい」や「今を大切にしていきたい」、「精一杯悔いなく楽しく」、「出来ることを全うする」などが述べられていた。著者らの研究では(2015)、在宅療養している終末期がん患者とその家族が在宅で看取ることに関して、患者の希望に合わせて家族が決意し、在宅で最期を迎えた家族は、在宅療養と在宅看取りについて満足していた。その一方で、病院で最期を迎えた終末期がん患者の家族は、在宅で最期を迎えた対象者に比べ、患者の希望を聞いていないなどのコミュニケーション不足や、話し合いをせずに意思決定をしないままに最期の場所が流れで決まり、後悔していたことが明らかになっている。出産においては、妊婦やその家族が希望する出産計画について、計画を立てる時に助産師に相談があることや情報収集をしていること、期待やこだわりを持っている方が出産計画への認識が

高く、その認識が高いと出産に対する満足度も高かったことが明らかになっていた(佐藤ら, 2011)。今回の講演会においても、医療任せにするのではなく、“看取り”や“お産”において、いかに主体的に自分で選択していくこと、一日を大切に生きていくことが重要であるか、再度考える機会となっていたと考える。そして、それは、死だけでなく生も一緒に考えることにより、暗い・怖いイメージだけになるのではなく、自然な流れとして考えることができ、あたたかい気持ちで、いのちについて見つめることができたと考える。

また、『いのちのつながり』について、考えたことがあるかの問いに、わからないと答えた人の中でも、「単純な話ではあるが、『前世は〇〇だった』とか、どれぐらいの時限でしか(考えて)なかった」などの記載があり、今まで考えていなかったが、今回の講演をきっかけに『いのちのつながり』について考える機会となったと考える。

2. 20～40代女性のいのちに関する認識

今回の講演会の参加動機は、「題名にひかれて」や「産みが入っていたので自分に近いと思った」、「ケアできることがあってもできないことがありジレンマを抱えていた」などであった。今までの死を中心とした講演会に参加したことがある人は2名しかおらず、20～40代女性にとって、死はまだ身近なものではなく、産みが入っていることで身近に感じて参加した人が多かったことが考えられる。

20～40代女性のいのちに関する認識では、『いのちのつながり』について、「お産と看取りは特別なものではなく一緒である」や「産むことも亡くなっていくことも自分のものなんだ」、「生も死も人任せで医療の影響が多すぎて本来持っている力が出せていない」、「亡くなるということの違う感じ方として、あの世に生まれるというのがある」などが見られた。地域住民同様、今回の講演会でのキーワードである“いのちのつながり”について、生と死のつながりを見つめることで、本来の人間の力について考える機会になっていたと言える。

『いのち』については、「あの世があると信じたほうが楽になり、意欲が出たきっかけになった」や「死までをどう生きるか前より考えるようになった」、「どう生きたいか、死にたいかは医療者のいいなりではなく、こうしてほしいと言えたらよい」、「亡くなることも産むことも辛くてエネルギーがいるので、その時に一人にしないことが大事」などがあった。“お産”と“看取り”は、両極端でかけ離れており、似ても似つかないと考えられているかもしれないが、以前は自宅で行われていたが、近年の医療技術の進歩により病院で行われることが多くなった(過度な医療介入)という点やそれぞれの体験は百人百様であり正解がない点においても似ている。加えて、どのように産むのか、どのように老いるのか、どのように病いを対峙するのか、どのように死ぬのかの主体は、生老病死の本人であり、まず本人の「思い」や「つもり」があって、医療やケアをどう使うかを考えなければならない(信友, 2014)とされ、今回の結果と一致している。

今回、一部の結果でのまとめであり、今後さらに質的記述的に分析を行い、分析を進めていく予定である。

3. 今後の課題

いのちについて考える講演会は数多くされているが、死からいのちについて考えることが多く、参加者が高齢者に偏ることがほとんどである。しかしながら、死は誰にでも突然訪れることがあり、高齢者だけの問題ではない。お産は人々が真剣にいのちと向き合う最大のチャンスである(大葉, 2015) ことから、今回、お産も含めて生と死を考える講演会として、“いのちのつながり”をキーワードに講演会を開催したところ、高齢者だけではなく、20～40代の女性の参加を得ることができた。これは、死についてだけではなく、“お産”というキーワードもあったことから、若い女性が身近に感じたことが参加動機につながったと考えられる。さらに、死だけではなく生も考えることからあたたかい気持ちになったとの意見もあり、生と死を切り離して考えるのではなく、一緒に考えていくことが本来の考え方であり、自然な流れとして、どのように生きていくのか、を考えるきっかけになることが示唆された。今回は、講演会のみで開催となったが、今後はさらに、この講演会をきっかけとして、市民で語り合い会なども検討し、継続して、生と死を考える講演会・語り合う会を開催していくことが大切であると考えられる。

V. 研究の成果等の公表予定

1. 地域住民のいのちに関する認識

2017年10月7日(土)・8日(日)に開催される第41回「日本死の臨床研究会」年次大会あるいは、他の関連学会にて発表する予定である。また、論文投稿についても実施できるよう、現在検討中である。

2. 20～40代女性のいのちに関する認識

同様に、2017年10月7日(土)・8日(日)に開催される第41回「日本死の臨床研究会」年次大会あるいは、他の関連学会にて発表する予定である。また、論文投稿についても実施できるよう、現在検討中である。

引用文献

- 岡本双美子、松延さゆり、河野政子、上原美智代、川口いずみ、梅田信一郎：終末期がん患者とその家族への在宅療養における支援内容とその評価，日本死の臨床，38(1)，160-165，2015
- 大葉ナナコ：妊娠期から始まる母親の健康づくり，チャイルドヘルス，18(7)，489-492，2015
- 佐藤彰子、梅野貴恵：褥婦のバースプランの認識と出産満足度との関連に関する研究，日本助産学会誌，25(1)，27-35，2011
- 信友浩一：チーム医療とリスク管理，純真学園大学雑誌，3，1-12，2014